



HOMO FABER
Crafting a more human future



press release

HOMO FABER 2022

Special column vol. 05

大西 勲 Isao Onishi

重要無形文化財「髹漆」保持者(人間国宝)

自然の流れのなかに見えてくる、自分なりの視点。



©Gerald Le Van-Chau

「まさかこんな仕事に就くことになるとは、まったく想像していませんでしたよ。すべては偶然の出会いの重なりのようなもので、自然に辿り着いたのが今いる場所なんですね」

漆芸家、大西勲の人生はまさに波乱万丈だ。生まれは福岡県の炭鉱の町、中間市。父は腕利きの大工だが、流れ職人。生活は貧しく、吃音があったことから同級生からいじられることも多く、学校にはあまり行かず父の仕事を手伝っていたという。家族が暮らしていたのは長屋の6畳一間。隣の家や通りの声も筒抜けで、自然と聞こえてくる大人たちの素の会話を耳にしながら、生の喜びや苦しみを幼心に焼き付けていった。

しばらくして中学校に入ると、その後の人生に大きな影響を与える人物と出会う。

「近くに越してきた4つ年上の先輩。あまり周りとは戯れない一匹狼的な存在で、とても頭のいい人でね。目上・目下に関わらず、人としてきちんと対応すること。手でモノを作ること。自ら進んで学ぼうとする意識を持つこと。すべて彼が教えてくれたようなものです」

その先輩に誘われて観に行った数々の外国映画から、大西はさらに多くを学ぶ。『許されざる者』¹では、どのような立場でも、それぞれに悩みを抱えていること。『終身刑』²では、厳しい環境下にあっても、人は一から学びを始められること。銀幕のストーリーはドラマティックだが、そこには生きることも、死ぬこ

ともすべてが必然のなかを描かれている。そんな経験を重ねながら、邪念を抱かず、流れに任せているだけで物事の真理に行き着くことができる、大西は悟るようになる。

中学を出た後、日本各地を転々としながら、大工、電気工、自動車の板金工、鎌倉彫の工房で働くなど、さまざまな職に就いた。大西が本格的に工芸の世界に足を踏み入れたのは、40歳のとき。作家としてはかなり遅いスタートだとも言えるが、それまでにさまざまな経験を重ねたおかげだろう。ものづくりに対する大西の心構えは大らかでいて、凛として力強い。

「ものづくりに携わっている人間だけが特別な存在じゃないでしょう。だって、人は誰しも体を使って生きているんだから、僕は自分のやり方しか知らないの、何が正解なのかは分からない。単に木を削って、漆を塗っているだけ。そのなかで素材や道具ときちんと向き合い、周囲の状況に振り回されることなく、自分の目線を保つこと。現実に目の前に何が起こっていて、それをどうしたいと自分が考えているのか。それだけに集中しています」

毎日陽は昇り、沈んでいくが、同じ太陽でも日々刻々と変化し、異なる光を放つ。そうした流れゆく時のなかで、いかに自己を見つめ、対峙するのか。こうした態度こそ大西のものづくりの基本がある。

さらに大西は、日本の自然のあり方もこの国

のものづくり文化と深くつながっていると考えている。

「大きな山々が連なり、そこから幾つもの川が流れる日本では、刃物の原料になる砂鉄とそれを鋭く研ぎ出すための砥石が各地で採取できる。また、不純物の少ない良質な国産のマツの炭で打った鋼は品質が良い。このように優れた素材、そこから作られる道具があるからこそ、細かな技が実現できている。僕らの仕事を支えているのは、豊かな日本の自然環境そのものなんです」



【注釈】

*1『許されざる者』／原題：The Unforgiven。1960年アメリカ映画。ジョン・ヒューストン監督の西部劇。主演は、バート・ランカスター、オードリー・ヘップバーン。アメリカン・インディアンと牧場主のあいだに巻き起こる人権問題を独自の視点から捉えた。

*2『終身刑』／原題：Birdman of Alcatraz。1962年のアメリカ映画。ジョン・フランケンハイマー監督。主演はバート・ランカスター。終身刑の囚人から、鳥類研究の第一人者になったロバート・フランクリン・ストラウドの実話を映画化したもの。

大西 勲／おおにし いさお

1934年福岡県生まれ。さまざまな職を経て、1974年に漆芸家で人間国宝の赤地友哉に弟子入りをする。石川県輪島漆芸技術研究所、香川県漆芸技術研究所などで講師を務める。2002年重要無形文化財「髹漆」保持者（人間国宝）に認定。2004年紫綬褒章を受章する。